

F Dの新展開 — 他の教員の授業に口出しする授業 —

橋 本 勝

(岡山大学 教育開発センター)

1. 学生参画型F Dの新展開

岡山大学が学生参画型F Dを本格化させてから4年近くが経過した。学生と教職員が恒常的にF Dの諸問題について協議・協働する形は、本学の特長の1つとして学内外にかなり浸透しつつあるばかりではなく、昨年9月に開催したX-Seed2004(東中四国教育改善学生交流)や11月に開催した岡山県内15大学の連携による教育シンポジウムなどを契機として周辺の大学にも普及し始めている。

この間、例えば、シラバスは学生にとって見やすく使いやすいよう年々改善されてきているし、学生による授業評価アンケートも学生提案を大幅に受け入れる形で質問項目を変更した。また、学生発想の正式科目が次々と誕生し、一般学生の要望する科目を実現するための新授業コンテストも開催している。新入生に対する履修オリエンテーションの一部を大学から正式に任せられてもいる。その他、次々と生み出されつつある実績は枚挙に暇がない。関心のある方は本学の公式ホームページにもリンクしている「学生・教職員教育改善委員会」(旧 学生・教員F D検討会)のホームページなどを参照して頂くか、毎年、本大学教育研究フォーラムに参加している学生諸君に直接お尋ね頂きたい。

さて、今回の報告は、そうした学生参画型F Dの延長に誕生した全く新しい試みの紹介である。既にその新規性・衝撃性はマスコミにより報道されてはいるものの、こうした研究会の場で正式に紹介するのは今回が初めてである。

2. 他の教員の授業に口出しする授業

誰が口出しするのか、学生である。どうやって口出しするのか、無論、面と向かってである。何を口出しするのか、授業のやり方・進め方・評価のし方・出席のとり方・笑いのとり方…など当該授業のあらゆる面についてである。私が同席するのか、とんでもない、学生だけで教員にアポイントメントをとって会いに行くのである。

えっ、と思われる内容であろう。しかも、これを行なうのは教育改善委員会のメンバーではなく一般の学生(大半が1回生)であり、「大学授業改善論」という正式授業の学習の一環として行なっているのである。

なぜ、そんなことができるのかについては当日解説するとして、ここでは、こうした科目の誕生の経緯を述べることにしよう。

一般には、こうした授業に関する意見の類は、学生による授業評価アンケートの自由記述などを通じて、匿名による文字情報として担当教員に寄せられるのが普通である。成績に響いては大変と、わざわざ筆跡を変えたり、ワープロ文書を張り付けたりする学生もいるし、せっかく建設的な提案をしてもフィードバックされるかどうか定かではないと不満をもらす学生も少なくない。また、文字情報が言葉のニュアンスをうまく伝え切れず、教員が内容を誤解することもよくあるし、自分の真意が授業ではうまく伝わっていなかつ

たと残念がる教員もいる。総じて、自由記述では伝えられることに限界があるといえる。

欠けているのが相互理解なら、直接会って話をするのが一番である。成績に響くのが懸念されるなら、もう成績をとくに付け終わっている時期にすれば良い。学生の一方的なわがままになりそうなら、そうならないようにきちんとした授業として、まず現在の大学教育がどういう状況におかれているかをしっかり理解・討議し、個々の授業についても多様な考え方をまずぶつけあって、意見の一般化・客観化をある程度図ればよい。こうした議論が上述の学生参画型FDの新授業提案ワーキンググループで行なわれ、誕生したのが教養教育科目としての「大学授業改善論」である。

3. 大学授業改善論の概要

今年度の実受講生は44名。うち、学生・教職員教育改善委員会の現委員は1名、元委員が1名、残りは一般学生で大半が1回生である。学部はさまざまで、大体理系・文系が半々程度の構成となっている。因に、この科目は今後、毎年開講の予定であり、おそらく受講生は年々増えることが予想される。

この44名が3名を原則とする13チームに分かれて活動している。チーム編成は、自分たちが共通して受講した教養教育科目または専門基礎科目（他学部生が受けると教養としてカウントされる科目）によっている。各チームは、まず、シラバスや授業評価・成績評価のあり方などの一般論について「橋本方式」（競争原理を活用する多人数ゼミ）で学習を重ねたり、全体討論などで意見表明のトレーニングをしたりしながら、ターゲット科目についての意見書を練っていく。

11月の半ばからは意見書をもとに発表してもらおうとともに、他チームからの修正意見や批判に 대응するという段階に進む。5～10分程度の発表と20～30分程度の質疑応答が活発になされた後、「決行」の可否を他チームの判定に委ねるという形をとっている。中には、チームとしての主張が他チームからは「学生の甘え」という受けとめられ方をしたり、主張がはっきりしないという理由で「決行」まで進めないというチームもある。

「決行」は当初から冬休み中を予定していたため、本稿執筆の時点ではまだうまくいったのかどうか不明である。（3月の報告時点ではそのあたりも含めた総括報告ができるはずであるが、うまくいく可能性が高いと考えている。）

4. 結びに代えて

各大学ともFDはそれなりに進んでいるが、中にはマンネリ化や参加者の伸び悩みなどで壁にぶつかっている大学もあろう。その一方で、機関別認証評価の開始などに代表されるように教育重視の社会的要請は一層強まっている。岡山大学が進めている学生参画型FDは、従来のFD観を大きく変えるものであるともいえるし、高等教育論の理論的検討を抜きにした実践重視の無鉄砲ぶりに眉をひそめている向きもあるかもしれない。この大学授業改善論などはその最たるものともいえよう。しかし、組織全体として教育改善を進めるために最大構成員である学生をスタッフ(studying staff)として位置づけ、双方向性を重視しながら知的共同体としての大学の真価を高めようとする我々の考え方は決して誤ってはいないと自負している。改善委員会の活動や大学教育改善論に対するマスコミの注目度の高さはそのことに対する社会からのエールといえるのではなからうか。